

じるものにとっては神の存在を告げるしとなるからである、と言われる。『告白』の統一性について、Chadwick は神から離れて迷う魂が苦難の後、回心によって神へと帰るといふ第九巻までの筋書きは、被造物全体にとっての筋書きでもあり、新プラトン主義と新約聖書とに共通するテーマであると言う。『告白』の統一性を上昇のテーマのみに見ることに対しては O'Donnell の批判的な評価もあるが、「上昇」を単に精神の上昇としてではなく、被造物全体の神に休らうまでの上昇として理解するなら、それが『告白』の指し示す一つの方向であることは確かであろう。なお、本邦においても宮谷宣史氏による美しい翻訳の上巻が出版されたことを記しておかなければならない。

Vernon J. Bourke:

Augustine's Love of Wisdom; An Introspective Philosophy,
Purdue University Press, West Lafayette, Indiana, 1992, pp. vii+234.

荻野弘之

アウグスティヌス『告白録』全巻のうちで、第10巻が自伝的部分(1-9)と聖書解釈の部分(11-13)を橋渡しする特異な位置を占め、しかも彼の哲学的思索のある典型を示している事実は今更言うまでもない。本書はこの第10巻の前半(1.1~30.42)をラテン語原文と英訳の見開きに収め、その前後に概説と註釈を加えた形で提供したものである。つまり『告白録』の個別的主題に関する最先端の研究書ではないが、従来の研究成果を吸収して要領よくまとめ、他の著作との関連にも適宜言及して、基本テキストを提供すると同時に、中規模な註釈書の役割をも果している。従って(以下に論評するような幾つかの欠陥にもかかわらず)初学者がアウグスティヌスの原文に直接ふれる手引として恰好の入門書であると共に、CommentsやNotesを通じて専門研究者にとっても本文解釈の上で有益な知見を得られる簡便な書物であると思われる。評者は本書をいずれ原典講読の演習の教本として教室で実際に用いてみたいと考えているが、同時に(思想概説書、翻訳、特殊研究のいずれとも異なる)こうした種類の書物が、わが国の翻訳業績や個別研究の進展をふまえて、日本語で出版される日

の到来を願っている。

全体は三部に分かれる。

- (1) 序論は 1-3 章からなるが、生涯や著作の解説といった冒頭の概説を別にして、最も特徴的なのは第 3 章において、「ここに抜粋されたアウグスティヌスの本文を理解する手引きとして、彼の哲学の出発点となった」とされる (p.32) “ten key views” (Three Levels of Reality, Rationes: Eternal and Seminal, The Immaterial Soul, Functions of the Human Soul, Active Theory of Sensation, Divine Illumination of Mind, Time as Mental Extension, Natural Desire for Happiness, Virtues and Moral Character, Two Cities: Terrestrial and Celestial) に即して、順次『告白録』と他の著作の関連箇所とを対照しながら論じている点であろう。神のいる場所を尋ね求めて自己の意識・記憶の内壁を踏査していくアウグスティヌス独特の手法を、著者は「内観の哲学」と称し、しかもそれを若き日のケケロの『ホルテンシウス』読書体験 (3.4.7) 以来変わらぬ哲学探究の足跡の延長に位置づけようとする (p.3) もので、そこが「知恵の愛」という本書の標題にもなっている所以である。
- (2) 本文は J. Gibb and W. Montgomery, *The Confessions of Augustine*, Cambridge University Press, 1927, pp. 272-305 を再録し、footnotes および critical apparatus を除いたものである。また対訳は「原文に忠実であることを旨とした」(p.55) 著者自身の手になる *Fathers of the Church*, Vol. 21, Washington 1953, pp. 263-301 の再録であって、この限り特に新味は感じられない。
- (3) 註釈の性格としては、本書とはほぼ同時期に刊行された大著 James J. O'Donnell, *Augustine Confessions*, 3 vols, Clarendon Press, Oxford 1992 が逐語的に文献学的・書誌学的な徹底性を誇るのとは対極的で、running commentary としての性格が強い。つまり全体を 8 章 (1.1-4-6: Searching for Divine Wisdom, 5.7-7.11: How God is known and loved, 8.12-12.19: Memory and Its Wonders, 13.20-15. 23: Deeper into Memory, 16.24-19.28: Oblivion and Transcendence, 20.29-23. 34: Happiness and Immortality, 24.35-27.38: Eternal Truth in Memory, 28.39-30. 42: Wisdom and Sensuality) に分け (この構成の理解は概ね妥当であろうと思う)、その中で各章節ごとの analysis と comments が交互に繰返される。この中では個々の重要語句について、その微妙なニュアンスを丁寧に解説し、他の著作の関連箇所に適宜言及し、さらに Notes の中でこれらと関連する基礎的な研究文献を挙げてい

るところに、評者は色々と教えられることが多かった。全体の叙述は平明かつ穩健であり、またそのゆえに、評者のこれまでの本文理解が決定的に覆されるという知的興奮を味わうことはできなかった。

また、せっかく原典をベースにしている以上は、本文の決定には最低限 Skutella 版 (Teubner 1934) を参照すべきであり、本文の異読や文法・語法上の問題点、聖書の引用に関する純粋に文献的な註が欠けているのが惜まれる。この点の扱いがやや軽いために、時に不徹底な読解の印象を受ける。全体に叙述は公平であり、他の著作にも言及されてよく目配りが効いているともいえるが、半面、しばしば話題が拡散しがちであり、前後の文脈を見据えた上で本文の徹底的な読解という、まさしく解釈の基本作業の点で、しばしば食い足りない不満が残ることも否めない。こうした一種の「粗さ」は序説にも共通する傾向であり、特に先に挙げた「十の鍵観点」のうち、ratio (p. 33-34), illumination (p. 42-44), two cities (p. 47-49) といった概念を座標軸に据えることが、果たして第 10 巻固有の読解に資するかどうか、疑問とせざるをえない。たしかにこれらの概念は初期作品、あるいは『神の国』などでは中心的概念であろうが、果たしてそのまま『告白録』にも移行できるのか、それぞれの著作は相互にどのように問題探究の位相を異にしているのか、を慎重に検討する必要がある。単なる並行・関連だけでは済まないのである。むしろ著者が、アウグスティヌスの中のあらゆる問題を、第 10 巻を舞台にして一挙に総覽的に論じようとしたとすれば、その企て自体に無理がある。第 10 巻前半を抜粋してアウグスティヌスの哲学の根本志向を洞察しようとする本書のユニークな着眼と構成は、皮肉なことにまさにその意図によって裏切られる結果になるのではないかと懸念する。そしておそらくこれは、何よりも全巻の中でこの巻がいかなる位置を占めているのか、が著者に正確に取り押さえられていない欠陥に由来すると思われる。すなわちアウグスティヌスにとって、自己の意識や記憶 (memoria) を内観的に探究することと、神を尋ね求めることが何故に結びつき、しかもその探究の歩みを貫く基本線がどこに見いだされるのか、という問題に他ならない。この論点に関する研究は様々な形でなされていようが、比較的最近の邦語文献として、管見の限り、荒井洋一「アウグスティヌスの記憶論における場所的空間的探求の意味」『東京学芸大学紀要』37, 1986; 荻野弘之「記憶の空間」東京女子大学紀要『論集』41-1, 1990; 加藤信朗「アウグスティヌス『告白録』における場所的表現の存在論上の意味について」『聖心女子大学論叢』81, 1993 (初出

は Shinro Kato, *Der Metaphysische Sinn Topologischer Ausdrücke bei Augustin, in Perspektiven der Philosophie*, 1978) ; 谷隆一郎『アウグスティヌスの哲学』(創文社 1994) 第三章「記憶と想起」(p. 55-98) などが挙げられる。無論、この問題はさらに今後一層多面的な検討を要することは言うまでもない。

なお著者は 1907 年生まれで、米国の中世哲学研究の長老的立場にある。トマス・アクィナス関係の著書も多いが、特にアウグスティヌスに関する著作としては、いずれも小著ながら *Augustine's View of Reality* (Villanova 1963), *Joy in Augustine's Ethics* (Villanova 1978), *Wisdom from Saint Augustine* (University of Saint Thomas 1984), *The Essential Augustine; Selected Writing with Commentary* (Hackett 1964) などが知られている。

本双書 *Purdue University Series in the History of Philosophy* には他に *Aquinas against the Averroists: On There Being only One Intellect*, by Ralph McInerny および *Confessions of a Rational Mystic: Anselm's Early Writings* by Gregory Schufreider が中世哲学に関する巻として収録されている。

D. M. Nelson:

The Priority of Prudence. Virtue and Natural Law in Thomas Aquinas and the Implications for Modern Ethics

The Pennsylvania State University, 1992, pp. xvi+164.

大鳥居 信行

本書は、次の二つの目標を掲げて、トマス・アクィナスの倫理学を全体的に再検討しようとしたものである。ひとつは、自然法や実践理性の第一原理についてのトマスの学説を重視し、トマスの倫理学を自然法を中心とした神学的な倫理学と見なす従来の標準的な解釈に対して、トマスにおいては、徳、なかでも賢慮 (*prudentia*) が中心に据えられている、ということを主張せんとするものである。これが、“priority of prudence” というタイトルの意味するところである。そして、もうひとつの目標は、トマス倫理学についてのそのような新たな解釈に基づいて、現代の倫理学のある種の